



### かならず、春は来る

人生に幾度となく訪れる「冬の時代」。受験生時代、フラれてばかりの青春時代、何をやっても失敗ばかりのスランプ期、大切な人失ってからの日々…渦中の身には、永遠に終わらない氷河期のよう

に思えてしまいます。地球も、これまでに何度も氷河期を乗り越えてきました。氷河期といえども思い浮かぶマンモスたちの時代には、地球の平均気温は7〜8℃も低下し、多くの動植物が死に絶えた厳しい時代が数千年も続きました。

### 地球を襲った「超氷河期」

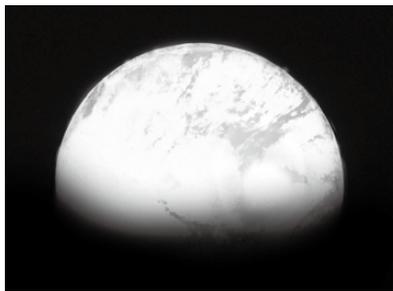
しかし地球がぐぐり抜けてきた最大規模の氷河期は、はるかに凄まじいものでした。

地球のすべてが凍りついてしまったら二度ととけることはない、

と多くの科学者が考えてきました。熱をもたらす太陽光が水にはね返されてしまうため、地球は永遠に氷の惑星のままのはずだということです。ところが近年、大地や地層に刻まれた痕跡から、およそ20億年前と7億年前に、海も陸もすべてが氷に覆われた超氷河期——「全地球凍結事件」が本場にあつたことがわかってきました。

### 奥底の熱が春を呼ぶ

永遠のはずの氷河期に春をもたらしたのは、地球深部の熱でした。奥底の熱が引き起こす火山活動が大気中に二酸化炭素を放出し、その温室効果によって地球は甦ることができたと考えられています。そして超氷河期を生き延びたわずかな生物たちから新たな生物が進化し、地球は現在のような生命あふれる惑星に変わっていったのです。大丈夫、必ず春は来る。地球の歴史が、私たちにそう告げています。



長い歴史の中で、宇宙から見た地球はさまざまな色に変化してきました。全地球凍結時代の地球は、まるで雪玉ようだった…かも？



今回は「馬乗2号墳」についてご紹介します。

馬乗2号墳は、市の西北部、幸田町との市境である馬乗丘陵上に築かれました。昭和60年、愛知工科大学の前身である、愛知技術短期大学の建設に伴う造成工事中に発見され、すぐ隣で見つかった馬乗1号墳とともに、同年10月11日から11月25日に発掘調査が行われました。

残念ながら、両古墳とも墳丘（石室を覆う丘のような高まり）はほとんど無くなっていました。それでも、馬乗1号墳はわずかな痕跡から直径5mの円墳、馬乗2号墳は古墳の回りをめぐる溝や、古墳の裾を取り囲むように石が見つかったことから、一辺15mの方墳であることが分かりました。特に、馬乗2号墳は、石を組み

### ～馬乗2号墳～

上げて造った横穴式石室の残りが良く、造られた当時の姿がとてもよく分かる古墳として注目されました。また、この石室の中からは、銀や銅で作られた武器、馬具、アークセサリーのほか、陶器なども発見されました。これらの調査結果から、馬乗2号墳は、今から千400年ほど前に造られたと推定されています。

馬乗2号墳で注目したいのは、石室の造りです。石室は入り口と一番奥がややすぼまり、中ほどが広がった形をしています。「胴張り形」といわれる独特の形で、この地方ではよく使われています。また、一番奥には、一つの大きな石を削って平らな面を表にし、据え置いています。石一つで奥の壁を造っているのです。

現在、馬乗2号墳は博物館の脇に移築保存されています。石室の中に入ることも出来ず。また、博物館には、馬乗2号墳の出土品も展示しています。当時の姿に復元された古墳を見学して、造られた時代を想像してみたいか、がでしよ



馬乗2号墳(発掘調査当時の姿)